

平成三十年  
通卷一二四号  
三月二十一日  
發行

# 尔鹿子



4月号

鈴 鹿 呂 仁  
拾 掬 集 その三十一

下 萌 や 地 中 の 胡 乱 切 り す て る  
水 音 を ま る く 結 ん で 春 立 て り  
立 春 の 天 元 を 打 つ 一 意 か な  
雲 影 の ひ と つ 無 き 空 春 立 て り  
北 窓 開 く オ ー ル 電 化 の 初 仕 事  
春 の 雷 蟻 の 隙 間 に 畏 ひ と つ



予報士の列島に撒く花粉症  
仙洞の一景におく梅一輪  
梅咲ふ婦系図は繻けず  
柚人の黙を開けば梅咲ふ  
早梅の虚ろを痛む御溝水  
反り橋を裏返したる鳥の恋  
永き日の楽句楽座へ九十九折  
牛追ひの馬柵に凭るる日永かな

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁



御苑の春

春 禽 の 碧 い 声 と ぶ 水 の 綾

御 苑 史 の 雅 た ど る も 梅 の こ ろ

梅 二 月 御 苑 の 風 の 皇<sup>すめら</sup> い ろ

き さ ら ぎ の 真 ん 中 に ゐ て あ る 五<sup>ご</sup> 蘊<sup>うん</sup>

き さ ら ぎ の 語 る も 語 る 五 線 堀

—  
近 詠  
—

和田 照海

枯故郷

目 秤 に し て 浜 売 り の 赤 海 鼠

小 さ き 墓 は 夭 折 の 兄 枯 故 郷

栈 橋 は 島 よ り 高 き 涅 槃 西 風

山 笑 ふ 鍼 灸 院 の 北 ま く ら

画 学 徒 の 軍 事 郵 便 風 花 す



松本 鷹根

寒明ける

凍て雲に金の縁取り沖に日矢

紅梅の花芽確かむ雨後の宮

水仙花光芒湖を渡り来る

土手芝に弾む陽を追ひ如月へ

寒明けの風に白光遠伊吹



## 近 詠

追 憶

塩貝 朱千

葉牡丹のきりきり切りも無き追憶

風ん子と忍び笑ひの野水仙

男舞まふ手の白し冴返る

ふんはりと抱くみどり児に春浅し

春の雪エディブルフラワー食みし夜に

# 英華採集

夫病みて柱の黙と除夜を聴く

高 槻 安 田 優 歌

病院で新年を迎えるご主人もさぞかし無念な思いをされていると思うが、今年は一人の年用意をすることになった作者の寂しさは計り知れないものがある。新年の準備も終わり一段落の自分の時間を取り戻すと否応もなく独りを意識することになる。「柱の黙」は、一家の大黒柱が居ないことを暗示しており季語の「除夜を聴く」と取り合わせたことで一層の悲しさを伝えることになる。

風呂敷に包み込まざる十二月

京 都 七 條 節 子

十二月は日頃お世話になつてゐる方へのご挨拶としてお歳暮を携えて訪問をする機会が多い。簡略してお店の袋に入れたままにする人もいるが、礼を重んじる作者は風呂敷に包み直して行かれたのであろう。掲句は、「包み込まざる」の否定形にしたことによつて詩情が生まれた。十二月は、師走と言われるほど雑多な時間を皆が過ごしている。せめて一時であつても十二月の喧噪を包まないとした作者の気持ちが見え隠れしている。

初雀鏡の中の声と聞く

亀 岡 西 村 摩 耶 子

朝早く雀が庭にやってくる光景は、何の変哲もない日常の一駒であるが、元日ともなればお目出度い新年の一景である。この句の裏には同じ新年の季語「初鏡」が隠れている。折しも鏡を覗いていた作者は亡くなつた母へ新年の挨拶を交わしていたのである。雀の可愛い声が耳を擦るように聞こえてきて母との会話が弾んでいる。初雀がもたらしてくれた今年最初の楽しいひと時を切取っている。

# 神麓集

春の風邪 藤岡紫水

嵯峨野路やお降りあとの竹の艶  
純白てふ翳りもありて鏡餅  
面白き世の入り口や手毬唄  
鶯や風の軽さに甘へ啼く  
白日の静けさ春の風邪心地

花洛忌 沼田巴字

花洛忌や絶え間なく散る谷の水  
会ふことは別れのはじめ朧月  
花万朶人は地に生れ地に死せり  
夕ざくらきらめくことは生きること  
よるべなき身を悠悠や春の雲

天狗 丸井巴水

冬眼の円さを解く青き風  
寒月の遠きへ妣を置きしまま  
鞍馬より天狗案内の牡丹雪  
敬一字ひそかに守り女正月  
石よりも素直な砂へ落つ椿

九条ねぎ 植村蘇星

改憲に売れゆき細る九条ねぎ  
鹿の子衆更に高みへ初句会  
夕暮れを早む乾坤雪催ひ  
くろがねの鯉の反転春隣  
万物のかすかな鼓動春兆し

# 神麓集

鳥雲に 北川孝子

一生のこのひとときの梅ひらく  
寒日 和水が光となる流れ  
しつとりと立つ待春の建礼門  
一語得て一語なほほし梅一輪  
旋回は別れのサインよ鳥雲に

冬 木 直江裕子

冬来れば雲のかたちに眠るかな  
枯木立つ風景の先めくれるから  
やがてゆく景色が見えて落葉踏む  
初読みややつぱり紙の本が好き  
凍鶴の思ひつめては足替ふる

袖 口 高木晶子

サンタクロースこれほど多勢ゐては雨  
来る年へ雪のカーテン白さ増す  
一身を使ひ切るまで大福茶  
袖口の白さ際立つ初詣  
黒猫の昨日を変へず時に雪

波 明 り 伊藤希眸

冬満月海を颯たせる波明り  
稜線の夕星枯蓮枯れの韻  
冬ばらの紅の濃きほど寂び深し  
鎌倉や散りて崩れぬ寒椿  
人情も知恵も足りない大晦日

# 神麓集

惜別 木戸渥子

朝昼夕あなたの紅葉振り観察  
散るのいや散りたくないと桜もみぢ  
忍び泣くやうに桜もみぢ降り  
桜もみぢの勿体ぶつた散りざまよ  
桜もみぢの散りぎは母が消えてゆく

自然治癒 奥田筆子

葉牡丹やわたしの部屋の四面書架  
針金の巢より生れて大天戈  
自然治癒虫歯に待てず松の内  
暗算の途中狐の横切りぬ  
百叩き寸胴丹波黒豆焚く

約束の 井上菜摘子

ふくろふ啼くからずれてゆく手拍子  
枯草や同期の肩が見当らぬ  
枯草や一言が火を付けてゐる  
いぬふぐりさびしきときは坐るなり  
約束のさくらさくらへ冬木の芽

花ばさみ 村田あを衣

日溜へ翳立てなほす冬の蝶  
年用意要をためす花ばさみ  
一心を闇にかよはせ除夜詣  
去年今年いつもの地図へ鍵を置く  
潮風の添ひし単線旅はじめ



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

氷上に天使も魔物も住む師走

桃源郷より大根葉流れくる

数へ日のコントラバスは過去紡ぐ

落葉落ち尽くして鬨志芽を擡ぐ

もう水を汲まぬ水車よ北風絡む

雪ふた夜母の寢息に添ふ二夜

越年す鬱と言ふ字にルビを打ち

身のどこか水の音して七日過ぐ

大綿の息に立入り禁止札

雪平に七草粥のひとり分

京田辺 山中志津子

京都 井尻 妙子

京菓子の千代紙包み春待月

冬芽はや神丘の陽を余すなく

草萌や空の腹筋割れてゐる

風呂敷の寿づくし玉藪

日一日寒満月は和三盆

空と湖美しすぎる寒さかな

青年の視線は遙か初山河

俵屋の脚の伸びたる寒の入り

鯛焼の鮮度目玉の知らぬこと

珈琲のスプーン金色初彗びす

城陽 鷺山 珀眉

京都 片山 熙子

長き夜を読みつぐ恋の成就まで

寒波くるわが現し身を楯とせむ

待つほどに聖樹の闇のととのひし

日々使ふもの身ほとりに年惜しむ

数へ日や些事といへどもあなどれず

年頭の零にはじまる白き道

ひらがなの言の葉並ぶ三日かな

埋火や本音は底の底にあり

枯尾花余生も光り失はず

プライドを捨てた裸木みな友人

福 山 亀井 福恵

福 知 山 西村 滋子



夫病みて柱の黙と除夜を聴く

千体佛の微光微笑や初明り

はなびらの小さき呼吸寒牡丹

寒紅やいのち囁くダイヤ婚

風呂敷に包み込まざる十二月

高 槻 安田 優歌

京 都 七條 節子

首と肩凝らせて年を締めつけり

繭玉を欲しいと泣きし子は六十路

鶴歩む端正にして端麗に

初雀鏡の中の声と聞く

らふ梅や視野の何処かにある遺影

夫あらず書籍ばかりの寒さかな

老の春めでたき中にある不安

揚ぎ立ての「あんも」とろとろ小晦日

参考書広げ眠る子三が日

スマホ持つ子は鞭や車中席

齋場へ集ふ家族や小夜時雨

目ざめれば見渡す限り春の雪

雪の道サクサクゆきて心晴れ

なごり雪友へ挨拶俳句かな

青空により美しき春の雪

炬燵より出られずに聞く風の音

冬ざれやタイヤ滑りて足縮み

四つ足の跡真つ直ぐや雪の山

これ以上捨てる物なし裸木並木

車窓には回る冬田や珈琲の香

長途終へ書齋の窓に冬の月

寒の朝鉄瓶の音庭に鳥

亀 岡 西村摩耶子

酒 田 藤波 松山

さいたま 神田 惣介